

ポポフ ニュース

2003年6月号

No. 10



▶ 日本から贈られたサッカーボールを手にするポポフの若者たち



ポポフ (POPOF) はポレポレ基金 (Pole Pole Foundation) の略称で、1992年にコンゴ民主共和国で設立されたNGO (非政府・非営利団体) です。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。

ポポフの目的は、コンゴ東部にあるカフジ・ビエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕する東ローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。

会員はほとんど国立公園周辺に居住する地元の人々で、調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、自然資源の持続的な利用をはかるように村人たちに呼びかけています。子供たちの年齢に合わせて環境教育のプログラムをつくり、就学前の児童から、大学生、主婦にいたるまでさまざまな教育事業を実施しています。また、国際交流を高めるために観光客に配布するパンフレットや絵はがきをつくったり、地元でエコ・ツーリズムを推進するための活動をしています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカフジ・ビエガ国立公園周辺の人々

の生活、アート、東ローランドゴリラを題材にした絵はがきを作成して販売し、展示会、講演会を開いて寄付を募り、現地で必要な物品を購入する資金にあてています。また、民芸品を作成する技術やアイデア、自然保護教育のための教材を提供したりしています。現地コンゴの政治情勢が思わしくないため日本ではまだポポフの会員を募集するまでに至っていませんが、

将来日本からも人材を派遣してより国際的な活動ができるようにしていきたいと思っています。

ポポフニュースは、最近のポポフの活動を紹介し、今までに日本で集められた資金がどのような活動に使われたかを報告するニュースレターです。現地の人々やゴリラの近況についても報告していこうと思います。また、ポポフが創作したポポフ・グッズや絵はがきの販売についても紹介しますので、お知り合いで興味のある方にもぜひ伝えていただきたいと思います。

ヘリコプターを制作中のダビッド・ビシムワさん▼



活動報告 (2002年6月から2003年5月まで)

2002年

6月1日～9月30日

- ポポフの活動紹介と絵本「ゴリラとあかいぼうし」展
千葉市動物公園動物科学館(千葉市)

6月1日

- 京都YWCAバザーにポポフの展示とポポフグッズ出展

6月11日～16日

- 個展「ゴリラと類人猿たち展」
麦畑耕生 堺町画廊(京都市)

7月7日

- 講演「家族の起源：ジャングルで学んだこと」
山極寿一 城陽市福祉センター(城陽市)

7月16日～21日

- 絵本「ゴリラとあかいぼうし」原画展

7月17日

- 「おきやん+山田はるぞう カリンバライブ」
ゴリラの歌<ゴリラとあそぼう>を歌おう!
- 「読み聞かせのためのゴリラ語指導」 山極寿一
堺町画廊(京都市)

7月30日

- 講演 法然院夜の教室「夜のジャングルを探る」
山極寿一 法然院(京都市)

8月4日～9日

- 国際学会発表 第19回国際霊長類学会大会
□演「Research and conservation of eastern
lowland gorillas in the Kahuzi-Biega National
Park, DRC」
Juichi Yamagiwa & Omari Ilanbu
国際会議場(北京市)

8月10日

- 講演 菅平夏期大学「ゴリラの社会から見た人類の進化」
山極寿一 上田教育会館(上田市)

7月1日～8月31日

- 特別展示「ゴリラの保護とポポフの活動」
千葉市動物公園動物科学館

11月14日～17日

- 国際シンポジウム・サガシンポジウム
ポポフ活動報告 国際観光センター(犬山市)



絵／阿部知暁

12月5日～7日

- 国際シンポジウム発表 The Eighth International
Symposium of Population Movements in Modern World, :
In, Out, In, Out : Populations, Migrations,
and the Social Ecology of Tropical Forests

□演「Migration and bushmeat trade in tropical
forests of Central Africa」

Juichi Yamagiwa 京都国際交流会館(京都市)

12月7日

- 京都YWCAバザーにポポフの展示とポポフグッズ出展

2003年

1月20日

- 講演「ゴリラの絵本をつくる」
山極寿一 京都市左京図書館

2月28日

- 本読み会「ゴリラとあかいぼうしをゴリラ語で読んで
ゴリラの歌をうたおう」

ゲスト：山極寿一・おきやん

第四錦林小学校(京都市)

2月1日～4月28日

- 「モモタロウ観察日記」と
「コンゴ民主共和国の子どもたちとの交流」展
千葉市動物公園動物科学館(千葉市)

会計報告

収入	昨年度よりの繰越金・	85,794
	講演会・シンポジウム カンパ・	108,518
	展覧会売上・	104,300
	作品売上寄付・	359,337
	ポポフグッズ売上(現金)・	170,277
	ポポフグッズ委託販売・	83,827
	寄付(現金)・	810,000
	売上・寄付(郵便振替)・	776,640
	受取利子・	11
	計・	2,498,704

支出	ニュースレター印刷費・	40,950
	ニュースレター・ホームページ作成費・	30,000
	ポポフグッズ材料費・	11,005
	郵送費・	50810
	絵葉書印刷費・	10,311
	事務費・	682
	ポポフへ送金・	1,000,530
	次年度へ繰越金・	1,354,416
	計・	2,498,704

「ろうきん東海NPO団体等寄付システム」と「日本グレイトエイプス保護基金」から、寄付金をいただいています。



日本みなさんへ

ジョン・カヘークワ

わたしたちは元気で活動をしています。(株)アサヒビールから寄付していただいたランド・クルーザーのおかげで、ポポフのメンバーはずいぶん遠い村まで出かけられるようになりました。何しろカフジ・ビエガ国立公園は6000平方キロメートル、私たちが活動している山地林だけでも600平方キロメートルの広さがあるのです。歩いて回れば何週間もかかります。電話も通じないところが多いのです。車があるおかげで連絡がとともよくなりました。物資を運んだり、病人を運んだりするのに大変役立っています。

国立公園は1970年の設立当初、公園の周囲に人々の小規模な森林利用を許す緩衝帯（バッファー・ゾーン）を設けませんでした。そのため、ゾウやイノシシなどの森林動物が畑に侵入して作物を荒らし、人々も住居や畑にすぐ隣接した森に入って薬草やたきぎをとったり野生動物を捕らえたりしたのです。

そういった公園と村との直接の接触を防ぐために、これまでポポフは植林活動を実施してきました。丸裸になっている村に成長の早い苗木を植え、それをたきぎや建材として利用することで、村人が公園へ立ち入ることを減らそうとしたのです。2002年の9月にも公園周辺の3つの村に合計20万本の苗木を配りました。植林した場所は全長15キロメートルにも及びます。これらの木々が育ってくれば、将来この場所が緩衝帯となるでしょう。

手工芸センターは順調に運営されています。ここでは以前公園内で密猟活動をしていた人々が働いていますが、今では公園の自然を守る情熱をもち、さまざまな工夫を凝らしてポポフ・グッズを製作しています。男性は彫刻を、女性は縫い物を主として行っています。最近は素敵なサファリ服がデザインされました。ポポフ・グッズは日本のほかにアメリカ、イギリス、ベルギー、



◀ 学校を建設するポポフのメンバー

ドイツ、ケニア、南アフリカなどで販売され、ポポフの活動資金に当てられるとともに、わずかではありますが手工芸センター職員の生活費になっています。

1999年に新しい環境教育学級として、ポポフは就学前の児童が学習するクラスを新設しました。今年からこのクラスは3つに増え、5人の女性教師によってたくさんのお子たちが環境の大切さを学んでいます。これらの教師たちも以前は森で不法な採集活動をしていた人々です。彼女たちも教育の仕事に就くことをとても喜んでいます。自分たちがしていたことを教材にして、森をどうやったら破壊せずに守れるかということを実験に考えています。

ポポフ日本支部からは最近、千葉動物園のお子たちによるお便りと質問が送られてきました。ポポフ環境教育学級のお子たちはそれをとても楽しんで読んでいます。みんなで相談して人形をつくり、絵を描いて、自分たちの生活を知らせる手紙を書きました。これからもいろんな情報を交換し合おうと楽しみにしています。

また、ポポフは11月に中学生（日本の中高生）向けの環境教育学校の建設をはじめました。この学校は将来公園のレンジャーになるための勉強や体験を積むところでもあります。現在、世界の国立公園の理念や運営方法は急速に変わりつつあります。私はそれを日本やケニア、ウガンダ、タンザニアの国立公園を訪問して学びました。その新しい知識を取り入れて住民参加による新しい公園造りを目指そうと思っています。

2001年の日本訪問で、私はとても多くのことを学びました。日本の伝統や文化を重んじる生活、環境保護の運動、アーティストの皆さん、そして動物園でも多くの新しい知識を得ました。たった一つ残念なことは、環境教育を学ぶ子どもたちとゆっくり話ができなかったことです。私たちコンゴの子どもたちと日本の子どもたちに明るい未来を築いてもらうために、今後もっと子どもたちの交流が発展することを期待しています。

(ポポフ会長)

ANA

▶ ポポフの苗木センター





カフジ・ビエガ国立公園の 狩猟採集民たち

ムスタファ・ピカバ

カフジ・ビエガ国立公園の周辺には、狩猟採集民のトゥワ人を含む7つの民族が住んでいます。これらの人々はそれぞれの文化と住んでいる場所の特徴によって、これまでさまざまな影響を公園に与えてきました。なかでも昔から公園内で狩猟採集活動をしてきたトゥワ人たちの活動はとても重要です。彼らの生活は全面的に公園内の自然資源に頼ってきたからです。動物のワナ猟、たきぎの採集、蜂蜜やきのこの採集、ときにはゾウなど大型動物を集団で狩猟してきたのです。1970年にここが国立公園に指定されたとき、多くの人々が公園から退去を余儀なくされました。トゥワ人たちはそれまでの生活を続けることができなくなったのです。それが今日まで続いている公園とトゥワ人たちの深刻な対立を生み出しました。

ポポフは1992年の創立以来、何とかして公園とトゥワ人たちとの対立を軽減しようと努力してきました。彼らはひとつの地域に定住しないので、なかなかその数を推定することができません。1993年に行われた人口調査で、公園周辺に400世帯1608人のトゥワ人が住んでいることがわかりました。私たちはトゥワ人たちにポポフの活動への参加を呼びかけ、これまでに11の環境教育学級で473人のトゥワ人たちといっしょに学びました。その中で、私たちもトゥワ人たちが森との関係を一切断ち切っては暮らしていけないことを知りました。それは彼らの文化や伝統をすべて喪失する結果となるからです。

そこでこの5年間、ポポフは狩猟採集民のための特別計画を実施してきました。とくに公園開設時に森林を追われた人々を対象にして、生活上の問題点を話し合い、環境を破壊せずに暮らしていく方法を検討しようという計画です。まず、各家庭の妻たちを対象に、手工芸センターで働くことを奨励しました。衣服を製作しながら少しずつでも収入を得て、現代の現金経済と暮らし方を学んでもらおうとしたのです。この活動によって、トゥワ人の女性たちと農耕民の女性たちとの交流の輪が広がり、さまざまな社会活動に参加できるようになりました。

1999年からは、トゥワ人女性たちがスワヒリ語の読み書きを勉強する教室をブユングレ村に開設しました。ブユングレ村を選んだのは、観光客がよく訪れる場所に近く、共通語のスワヒリ語を使用する機会が多いと判断したためです。2001年からはこれらの女性のうち8人が選ばれて服を仕立てる仕事を習い始めました。ポポフ日本支部の援助のほかに、ダイアン・フォッシー・ゴリラ基金からの援助によって8個のミシンを購入し、これらの学習に利用しました。1年間にわたる研修期間を経て、8人の女性は長袖シャツ、ブラウス、スカート、ドレス、サファリシャツなどを製作する技術を身につけました。2002年の11月にヨーロッパから注文があり、彼女たちは最初の仕事を始めました。これらの服飾の仕事によって少しずつ現金収入が入るようになりました。このほかに、トゥワ人女性たちは覚えたスワヒリ語を使って市場へ出かけ、農作物を売って生計を立てるようになりました。

ブユングレ村は公園の境界に接しており、近くにはビリンドゥワと呼ばれるゴリラの集団が暮らしています。トゥワ人たちの保護に関する意識が高まったおかげで密猟はめっきり減り、伐採やたきぎ採集などの活動も減少しました。2003年にはこの活動を近くのムヤング村やカションド村へ広げ、さらに16人のトゥワ人女性が研修を受けることになりました。現在、40世帯のトゥワ人たちがポポフの指導によって農作物を販売して現金収入を得ています。

こうした活動を続け、世界遺産であるカフジ・ビエガ国立公園の自然を大事に保護し、私たちの子孫にも利用できる形で残そうと思っています。これからはもっと多くの若者や女性たちがポポフの活動に参加するようになるでしょう。日本の皆さん、どうか暖かく見守ってください。（ポポフ事務局長）

▼女性のための環境教育学級



▼ポポフの運動会





千葉市動物園の子どもたちと カフジ・ビエガ国立公園の子どもたち

山極寿一



2002年の7月から10月にかけて、千葉市動物公園の動物科学館でポポフの活動を紹介する特別展示を行いました。千葉市動物公園は、この展示を見た日本の子どもたちのうち、幼稚園児と小学生229人にアンケートをお願いしました。日本の子どもたちが、コンゴの子どもたちに聞いてみたいことをあげてもらったのです。日本の子どもたちの日常生活を知ってもらうための項目もありました。

そのアンケートの結果をポポフに送って、今度はカフジ・ビエガ国立公園周辺の村にすんでいるコンゴの子どもたち136人に、日本の子どもたちの質問に答えてもらいました。その答えを1月に来日したバサボセさんが届けてくれました。以下は、そのアンケートと答えをもとに、千葉市動物公園の並木美砂子さんが日本とコンゴの子どもたちの交流をまとめた要約です。

同じ質問を日本とコンゴの子どもたちにしてみると、こんな答えが返ってきました。

- 学校で好きな時間は（回答の多い順）、
日本：休み時間、体育、図工、給食、プールなど
コンゴ：歴史、お絵かき、かけっこ、読書、体育など
- 身の回りで見たことのある動物は、
日本：イヌ、ネコ、小鳥、ウサギ、カラスなど
コンゴ：ニワトリ、ネズミ、小鳥、イヌ、ウシなど
- 好きな動物は、
日本：イヌ、ウサギ、ハムスター、ネコ、ゾウ、ペンギンなど
コンゴ：ゴリラ、ゾウ、ヤギ、ニワトリ、チンパンジーなど
- 大切なものは、
日本：ぬいぐるみや人形、ペットや生き物、ゲームなど

コンゴ：ぬいぐるみや人形、本、おもちゃ、写真、自然など

日本の子どもたちの質問に答えてもらいました。

●何になりたいですか？

国立公園の職員、森の技術者、医者、先生など

●好きな食べものは？

ウガリ（キャッサバととうもろこしの練りもち）、ミルク、パン



コンゴの子どもたちの手紙を2つ紹介します。

僕の名前はオンベニ・マレガーネ。11歳の男の子です。僕の家にはアヒルとニワトリがいて、その世話をするのが僕の一番の仕事です。野生動物はとても面白くて、よくゴリラを見に行きます。好きな動物はヒヒです。僕の趣味は友達と遊ぶことと動物について学ぶことです。家の近くにはイヌ、ネコ、ヤギ、ウシがいます。一番大切なことは、友達のラフィキ、オンベニ、

スティーブと仲良くすることです。

私の名前はナビントゥ。12歳の女の子です。私は布で人形を作っています。友達のイザベルやミシェリンといつもウサギやブタに餌をやっています。水を引いて家をきれいにするのが私たちの仕事です。私の趣味は学校からの帰り道でボール遊びをしたり、山へ遊びに行ったりすることです。そこで、カエルやチョウチョや小さな動物を見るのが大好きです。

日本とコンゴの子どもたちの交流はまだ始まったばかり。今後もいろいろなことを質問して、互いの暮らしや未来を語り合おうと思っています。





ゴリラたちの近況

山極寿一

2000年に総合調査を実施して以来、カフジ・ビエガ国立公園の職員たちによって毎日4つの集団のゴリラたちの様子が観察され記録されてきました。さらにもうひとつの集団のゴリラが、京都大学とコンゴ中央科学研究所の共同プロジェクトによってモニターされています。9月から11月まで、内戦をしている2つの勢力の前線がこれらの集団の遊動域に移動してきたため、なかなかゴリラたちと接触することができませんでした。今年になってやっと戦闘がおさまり、また毎日ゴリラたちを観察できるようになりました。この4月までのゴリラたちの様子を報告します。

ムガルカ集団は12月に別の集団と衝突し、ほとんどのメスとその集団に移籍してしまいました。事件が起こったのは12月2日です。ムガルカは背中大きな傷を負い、未だに元気がありません。ムガルカのもとに残ったのはメスのルシャシャと2歳半になるチュバカだけです。現在、ムガルカはルシャシャやチュバカとともに他の集団との出会いを避けてひっそりと暮らしています。

ムガルカに傷を負わせたのは、ソソという17歳の若いシルバーバックです。ソソは1986年マエシェ集団生まれ。シャバの息子です。12歳ごろからヒトリゴリラになり、その後行方がわからなくなっていました。今回ムガルカと衝突したときは数頭の小さな集団でしたが、ムガルカのメスの大半を獲得して14頭の集団になりました。ソソは生まれつき人間によく慣れていて、公園のガイドやトラッカーが近づいても怖がりません。私

たちはこの集団に新しい名前をつけようと今相談しているところです。

ミシェベレ集団からは、若いメスが1頭いなくなったので現在は39

頭になりました。でも相変わらず大きな集団で遊動しています。ミシェベレはいつも落ち着いていて、メスたちの信頼も厚いようです。赤ちゃんはこの1年生まれていませんが、おなかの大きいメスが2頭いて、近いうちに出産しそうな気配です。

ムファンザーラ集団はこれまであまり人に慣れていませんでしたが、最近やっとムファンザーラが少しずつ警戒を解くようになりました。秋に赤ん坊が生まれて、ムファンザーラの他に8頭のメスと3頭の子ども、2頭の赤ん坊の総勢14頭の集団になりました。将来が楽しみです。

ビリンドウワ集団からは2頭のメスがなくなって、合計13頭になりました。ビリンドウワがあまり人慣れしていないために、ガイドやトラッカーと距離を置いていて、すべてのメンバーを確かめることが難しい状態です。でも、元ニンジャ集団にいたイラギ、カンバ、ゾヴ、クワレはちゃんと集団にいたことが確かめられています。まだ出産が確認されていませんが、ゾヴはお腹が大きく、おそらく妊娠していると思われます。夏までには赤ちゃんが誕生するでしょう。

以前は20頭以上のゴリラがいたガニャムルメ集団は、2001年にヒトリゴリラと衝突し、2つの集団に分裂しました。今は若いシルバーバックのアルフォンスが3頭のメス、2頭の子どもといっしょに小さな集団で遊動しています。公園のガイドやトラッカーたちがモニターしている集団とは少し離れていますが、近くには約20頭のチンパンジーがすんでいます。毎日バサボセさんや以前来日したムワミさんが計画を立てて、ゴリラとチンパンジーの動きを追跡しています。以前このあたりを遊動していた3つのゴリラ集団は内戦の最中に消滅してしまいましたが、ガニャムルメ集団はかろうじて生き残りました。チンパンジーのカボコ集団も運良く密猟の被害にあうことなく生きながらえたのです。

これらゴリラの集団を率いているのは、老練なミシェベレを除くとまだ20歳前後の若いオスたちばかりです。内戦の犠牲となったベテランのリーダーたちに負けないくらい立派に、集団の安全を守り、おいしい食物のありかを探し当ててほしいものです。ムガルカ、ソソ、ムファンザーラ、ビリンドウワ、アルフォンスがどんなオスに成長するか、とても楽しみです。



公園のパトロールには銃が用いられる。



▲ムガルカとトラッカーたち

知

ポポフ・グッズの通信販売のお知らせ

ポポフ日本支部では、ポポフの会員が作成したポポフ・グッズを販売して、その売り上げを現地の活動資金に寄付しています。ご協力いただける方は、郵便局で青色の振り込み用紙に口座番号：00810-1-90217, 加入者名：ポレポレ基金、と記入した上で、ご希望の品名を書き込み、該当する金額をお振り込み下さい。折り返し、グッズをお送りいたします。

☆ポポフ絵はがきセット(10枚組)	1000円
☆ビチブ・ムフンブーカ絵はがきセット(5枚組)	600円
☆東ローランドゴリラ・ペンダント	2200円
☆東ローランドゴリラ・キーホルダー	2200円
★ポポフペンダント	1200円
★どこでもゴリラ・ブローチ(木彫り)	3000円
★プチゴリラ(木彫り)	5000円

連絡先：〒606-8502

京都市左京区北白川追分町

京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室
ポポフ日本支部



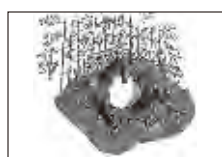
☆ポポフ絵はがき
セット(10枚組)



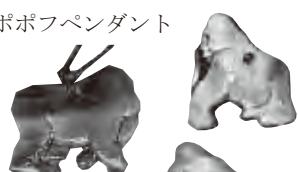
☆ビチブ・ムフンブーカ
絵はがきセット
(5枚組)



☆東ローランドゴリラ
ペンダント・キーホルダー



★ポポフペンダント



★どこでもゴリラ・
ブローチ(木彫り)



★プチゴリラ(木彫り)

ポポフのホームページ

<http://jinrui.zool.kyoto-u.ac.jp/Popof/index.htm>



▲自作の絵本「ゴリラとあかいぼうし」を
手にしたダビッド・ビシムワさん

ポポフの活動紹介、カフジ・ピエガ国立公園、東ローランドゴリラ、ポポフ・グッズなどがカラー写真で紹介されている他、今まで紹介されている他、今までのニュースレターがすべて閲覧できます。ゴリラの歩く姿がとってもユニークですよ。昨年来日したポポフのアーティスト、ダヴィッド・ビシムワが製作したアートも通信販売しています。ぜひ、一度ご覧下さい。

お願い：左記のようなポポフの紹介とポポフ・グッズの展示・販売を各地で行いたく思っています。可能な場所と展示を引き受けてくださる方があれば、ご連絡下さい。

催しのご案内

ポポフ展

「早川篤の石ゴリラ展」

● 7月8日(火)～13日(日)
11:00～19:00

● 7月12日(土) 15:00～
ワークショップ「石でゴリラを作ろう!」

● 7月8日～13日同時開催で絵本
「ジンガくんいちばへいく」の原画展示もしています。

● 7月12日(土) 13:00～
「子どもたちのためのおはなし会」

場所：堺町画廊 京都市中京区堺町通御池下る

Tel. 075-221-5370

<http://www.h2.dion.ne.jp/~garow/>

地下鉄：烏丸線で烏丸御池駅から御池通を東へ5分
東西線で市役所前駅 Zest 8番出口から御池通を西へ5分

絵本くんくんおいしどうめ原画展とポポフの紹介

● 10月1日～12日 阿部知曉
木土水ギャラリー(越谷市)

むかしむかし、ひとりの猟師がおりました。猟師は森で罾を仕掛けて動物を捕り、村人たちに届けていました。

ある日、猟師はいつもより遠くの森まで出かけて行きました。たくさん獲物を捕ったのですが、もっともっと捕まえようと欲を出して、森の奥深くまで入って行きました。そしてとうとう、帰る道が分からなくなってしまいました。

深い森の中で、猟師は不思議な人に出会いました。でも、それは人ではなくて魔物だったのです。魔物は肩にムゴンバ(バナナの木)を担いでいました。その頃はまだ、人々はバナナがどんな物なのか知りませんでした。魔物は猟師に言いました。「おい、村へ帰る道を教えて欲しいだろう。だったらこの荷物を持ってくれ。そうしたら、村へ着けるようにしてやろう」

猟師がバナナの木を担ぐと、魔物は目を閉じるように言いました。猟師が目を閉じると、驚いたことにもう村に着いていました。魔物も村の入り口から入ってきました。そして、猟師に言いました。

「さあ、今すぐ家の裏へ行って穴を掘るのだ」

猟師が家の裏に穴を掘ると、魔物は言いました。

「では、このムゴンバをそこに植えるのだ。でもその前にすることがあるぞ。森へ行って、あらゆる動物の血を集め、その穴にそそぐのだ」

猟師は魔物に言われたとおり森へ行き、イノシシやヒツジ、ヒョウやライオンからウサギにいたるまで、ずいぶん苦勞して動物を集めて来ました。そして、その血を穴に注ぎました。すると、魔物は言いました。

「ここにムゴンバを植えて待つのだ。その実が熟れてきたら、それで酒をつくるがいい。けれどその酒は、決して一人で飲んではいけない。出来た酒は、村の人みんなを呼び集めて、一緒に飲むのだぞ」

8ヶ月あまり待っていると、ムゴンバの実のみごとに大きく育ちました。猟師は魔物が教えてくれた通りに、カシキシという酒をつくりました。

村の人々は、初めて酒というものを飲みました。誰もが酔っ払いました。ある人は、ブタのように泥の中を這い回り、また別の人はヒョウカライオンのように恐ろしくなりました。またある人はウサギみたいに人をだますと言った具合でした。

この時から、酒と言うものが人々に知られるようになり、人々は酒づくりを始めました。今でも、人々が決して一人で酒を飲まないのは、初めて酒がつくられた時の約束があるからです。もしあなたが一人で酒を飲んだなら、酒に殺されてしまうでしょう。人が酔っ払うと、その酔いかたはいろいろな動物に似ています。これは酒を人々に伝えた魔物が、ムゴンバを植える時に、いろいろな動物の血を注いだからです。

酔っ払いの姿は様々ですが、どれも動物の性質を持っています。このお話は、酔っ払いの訳も教えてくれます。

コンゴ民主共和国東部の酒は主にバナナ酒。木をくりぬいて作ったカヌーのような容器の中で、酒用バナナの実をつぶし、ソルガムと水を混ぜ、発酵させて造る。飲み頃はほぼ一日。飲みに来る人は拒めず、酒はみんなのもの。

訳／絵：伏原納知子



■ 寺嶋秀明著

『森に生きる人：アフリカ熱帯雨林とピグミー』 小峰書店

■ 加納隆至・黒田末寿・橋本千絵編著

『アフリカを歩く：フィールドノートの余白に』 以文社

■ 西田利貞・上原重男・川中健二編著

『マハレのチンパンジー《パンスボロジー》の37年』

京都大学学術出版会

■ 諏訪兼位著

『アフリカ大陸から地球がわかる』

岩波ジュニア新書

■ 白幡洋三郎監修・サントリー不易流行研究所編

『大人にならずに成熟する法』 中央公論新社

■ 小馬徹編 『カネと人生』

雄山閣

■ 菅原和孝著 『感情の猿＝人』

弘文堂

■ 鷲田清一編著

『＜食＞は病んでいるか：揺らぐ生存の条件』

■ あべ弘士著 『どうぶつ句会』

学研

近刊

■ 西田正規・北村光二・山極寿一編著

『人間性の起源と進化』

昭和堂

■ 山極寿一著 『オトコの進化論』

ちくま新書